サスティナブルな地球・社会のための“学び”応援マガジン

国連持続可能な開発のための教育の10年　イーエスディー・レポート

ESDレポート

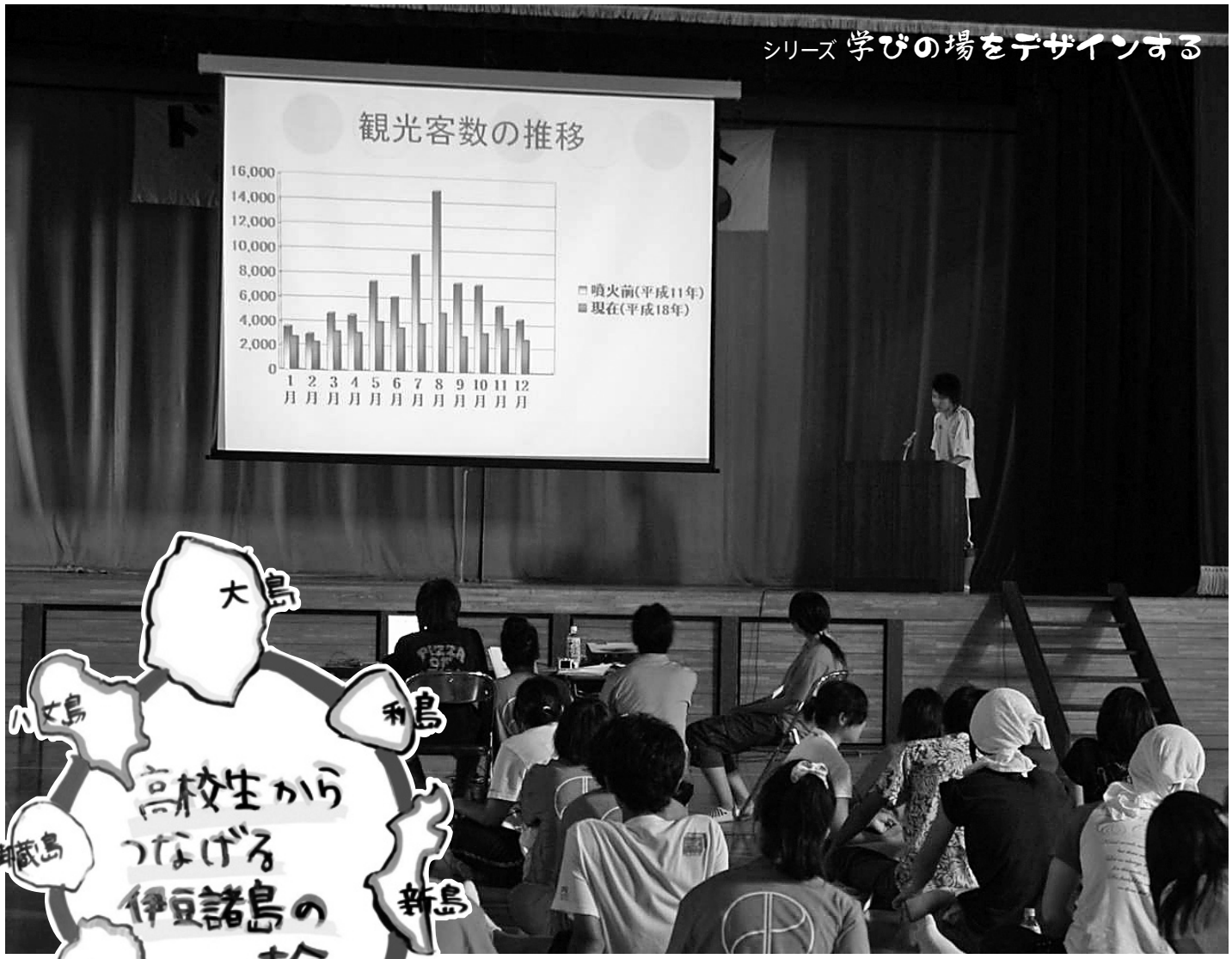
Education for Sustainable Development

vol.21　2010 早春

2010 年 1 月 26 日発行

NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10 年」推進会議

ESDとは「持続可能な開発のための教育=Education for Sustainable Development」の略。ずっと続く地球、社会、地域のためにすべての人が取り組む。そんな豊かで公正な未来を創造するための「価値観」と「スキル」を育む、未来創造型の「学び」です。「国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」が2005年からスタートし、世界各国で取り組まれています。



高校生の島への想いが人と地域を動かした

「伊豆諸島ドリームプロジェクト」

21 号の見どころ

- 学びのデザイン：高校生がつないだ島々の想い、島々の若者（p.2-3）
- つなぐ人の視点：コーディネーター研修の参加者たちのつなぐ視点をレポート！（p.4-5）
- 数字で見る社会：日本は中国の 2.5 倍（p.4）
- 発見身近な ESD：命の循環を体感する地域ぐるみの活動が地域社会を育む（p.6）

Japan Council on the UN Decade of Education for Sustainable Development

ESD-J

「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

本シリーズは、ESD につながる全国のさまざまな活動を、「教育」の視点で紹介していく事例レポートです。

高校生の島への想いが、人と地域を動かした「伊豆諸島ドリームプロジェクト」

東京都立大島海洋国際高校ドリームプロジェクト実行委員会

2008 年 7 月、東京伊豆諸島の大島に伊豆諸島の各島から高校生 88 人が集まりました。それは一人の高校生の島への思いが動かした、人と人、人と島を結んだ“夢”という名のプロジェクトでした。「ドリームプロジェクト」（通称：ドリプロ）と呼ばれたこの活動は、伊豆諸島 5 島 6 校から集まった高校生たちが、自分たちの島のくらしや文化を改めて見直し、島の魅力や課題について一緒に学び、話し合い、島の将来を考えながら、つながりを深めるという、地域を巻き込んで実施された 3 日間の大イベントでした。

島の活性化には、島の高校生がつながらなきゃ

この企画を立案し、中心的に進めた穴原航太郎くんは、東京都立大島海洋国際高校の 1 年生の時に参加した「三宅島復興のシンポジウム」の発表を聞き、島の復興には住民参加と島の内外の交流が重要であることを知りました。そして、伊豆諸島を活性化するために、各島で暮らす高校生が、もっと島の問題に目を向け、話し合うことで自分達の将来を見つめることができるような出会いの機会をつくりたいと感じたといいます。早速、高校の友人や先生に「各島の高校生たちに声をかけて交流できないだろうか？」と相談しました。友人の「おもしろそうじゃん、やろうよ」、先生の「人のやらないことをやってみろ」の声に背中を押されながら、賛同してくれた高校の友人を中心に 2007 年の 6 月に実行委員会を立ち上げました。

島への思いを伝え、形になる

企画を実行に移すために、まずは各島の高校の生徒会へ思いを伝えてまわりました。最初から賛同を得られる場合もあれば、説得に時間のかかった場合もありましたが、高校生から高校生へ島への思いはゆっくりと伝わっていきました。

また、彼は大島町の町長や役場職員をはじめ、多くの地域の大人たちへも計画段階から自分の思いを伝えて回りました。その結果、一番の課題であった資金面においては、トヨタ財団の助成金を獲得したほか、島しょ振興公社の援助や、東海汽船や大島バス、宿泊施設などの協力を得ることができ、大きく実現へと近づきました。

プログラムの内容や進め方に関しては、実行委員会のメンバーがたびたび集まって議論し、開催に向けて浮かび上がる大小さまざまな課題についても、粘り強く相談、協力しながら一つひとつクリアしていきました。

「ドリプロ」は学校行事ではなく、あくまでも生徒による自主企画として進められてきましたが、およそ 1 年 2 ヵ月におよぶ準備期間を経て、開催直前に行われた校長会での話し合いの結果、特例の学校行事として位置づけられ、学校からも全面的な協力を得ながら実施へと進みました。

だれもが島を愛し、何とかしたいと思っていた

イベント当日、各島から集まった 88 名の高校生たちは、スポーツ大会やレクリエーションプログラムで交流を深めるとともに、メインプログラムである「伊豆諸島について考えるシンポジウム」を実施しました。シンポジウムでは、事前に各校の生徒それぞれが住む島のくらしや自然、文化について調べ、高校生の目で見た島の問題点を浮き彫りにし、さらにその改善策についてまとめて発表しました。

さらにグループごとに分かれて、「島が好きか？」「将来島に住みたいか？」「これからもつながりをつくりたいか？」「今後できることは何か？」といったテーマについて議論をしました。ディスカッション終了後、同じ「島」という環境で育った人たちは、ほとんどの人が島を愛していること、多くの人が島をなんとかしたいと考えていることに、参加者から驚きの声が上がりました。

このプロジェクトの実施前と実施後に試みたアンケートによると、「将来島へ住もうと思いますか？」という質問に実施前にYES と答えた人は 50 名であったのが、3 日間の活動を通じて 57 名に増えたそうです。参加者の一人はこの「ドリプロ」を「人を変えることができる夢のような企画だった」と感想文の中で述べています。また別の生徒は「島どうしがつながることで、都心とは違ったまちづくりができると実感した。自分もその輪の中にいるのに、ひとつにならないともったいない」と語っています。

このプロジェクトの成果として、穴原くんはこのような一人ひとりの心の変化はもちろん、高校生が島のいいところや問題点を改めて見直し、そのような思いを持った同世代の若者がつながったことにあると捉えています。さらに、そのような若者たちの行動が島に暮らす多くの大人たちも刺激したこともあるでしょう。

思いを行動に移す原動力

これだけの大きなプロジェクトを一から立案し実現させた高校生の並外れた行動力と島への思いは、どのように育まれたのでしょうか。

穴原くんに話を伺うと、二つのことが浮かんできました。一つは、2000 年に起こった三宅島大噴火により島を離れて過ごした 4 年間の避難生活です。島に帰れない時間が改めて島を思う機会となり、また、多くの人に助けられて島へ帰ることができたとき、大きな喜びを感じたそうです。

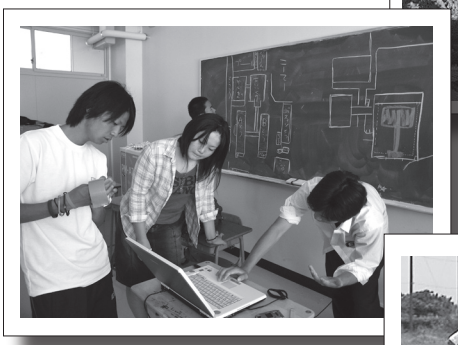
そして、もう一つは三宅中学校での活動や学習の影響もあったようです。帰島後、三宅中学校では生徒会活動として、お世話になったさまざまな方へ“三宅島はがんばっています”“ありがとう”という自分たちの思いを言葉にしてお礼のメッセージを送りました。また島で暮らす一人暮らしのお年寄りの家の片付けなどを積極的に行いました。それらの活動に生徒会長として積極的に取り組んだのが穴原くんでした。また当時校長だった冨田先生の、島のことを子どもたちがしっかりと受け継ぐことが重要という考えのもと、「総合」の時間や教科学習において、農家や漁師の方などさまざまな地域の方の協力を得て、三宅島の自然や文化伝統に関する学習が、地域ぐるみで丁寧に行われました。「災害をきっかけに、子どもたちの島への思いを未来の行動へと導きたい」という先生たちの思いがあり、学校でのさまざまな取組みが教員、保護者、地域の人と一体になって進められたそうです。

当時をふりかえって、そのような経験があったうえに、高校での同じ思いを持った友人たちとの出会いが原動力であったといいます。

最後に、穴原くん自身がこのプロジェクトを通じて得たものは何かと聞くと、「熱い思いを持って行動すれば人の心を動かすということを実感しました。多くの人に語りかけていくことで、同じ思いの人に出会い、つながりができていきます。そのつながりをこれからも大切にしていきたいです」と、すがすがしい答えが返ってきました。

取材協力：多摩市立 東愛宕中学校 冨田広校長（元 三宅村立三宅中学校 校長）
取材・執筆：ESD-J 佐々木雅一

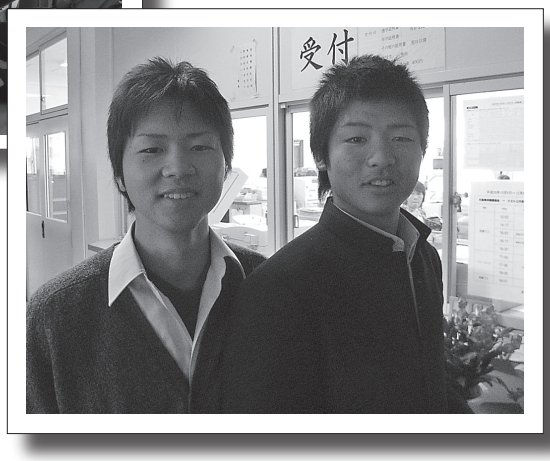
2000 年 8 月の三宅島噴火→
（撮影：旧坪田中学校 山本教諭）



←事前準備

海水浴やリレー、バンド演奏、肝試しなどレクリエーションで交流も→

←グループ討論



向かって左が、プロジェクトをすすめた実行委員長の穴原航太郎くん→

つなぐ人の視線 ＜第７回＞

コーディネート実践トレーニング　参加者から

このコーナーでは、社会のつなぎ手にお会いし、大切にしている価値、方法、未来への思いなどをうかがいながら、つなぐという仕事について考えていきます。第７回は、2009 年の 12 月に開催したコーディネート実践トレーニング（講座の詳細は８ページ参照）に全国から参加された、社会のつなぎ手の方やつなぎ手を目指す方々の視点をダイジェストでお伝えしたいと思います。

人と人、人と自然、人と社会をつなぐときに、あなたが大切にしていることは何ですか？

葛飾区市民活動支援センター　石川寛子さん

多くの外国人が暮らす葛飾区において、多文化共生をテーマに日本人と外国人が交流・協力し、日本人も外国人も安心して暮らしていけるまちづくりに取り組んでいます。

日本と外国の人をつなぐときに大切にしていることは、日本人だから、外国人だからということを意識せず、平等に扱うことです。そして、本当の手助けになることを見極めることを心がけています。無理に相手の困っていることを聞き出そうとしたりすると、親切の押し売りになりかねません。

そのために、外国人の思いや悩みを話してもらうスピーチフェスティバルや、外国人の方の開かれた子育てコミュニティをつくるためのフェスティバルを開催したり、日常的な交流の場として、日本人と外国人がともに参加したお茶会や、音楽フェスタを開いたりしています。

ボーイスカウト日本連盟 他　高野新平さん

ボーイスカウトを 55 年続けており、野外活動を通じた環境教育を行っています。今後は、自治体や学校を巻き込んでこの活動を広げていきたいと考えています。

子どもと自然、子どもと子どもをつなぐためには、まずは自分自身が楽しんでみせることが大切です。難しい言葉で説明しても子どもはついてきません。口で説明するのではなく、自分自身の行動で楽しさを伝えることを大切にしています。

昔は皆が集まるだけで楽しく、皆で活動すること自体が喜びでした。しかし、現在の子どもは、テレビゲームやインターネットなど、物が豊かな半面、人間関係が希薄になっています。そのような子どもに心を開いてもらうのは難しい。人間の心の交流を通して育まれる、コミュニケーション力やフレンドシップ、フォローシップ、リーダーシップなどの資質を、野外体験活動を通じて人と人、人と自然をつなぎつつ、育んでいくのが私の勤めです。

数字で見る “社会” 第３回

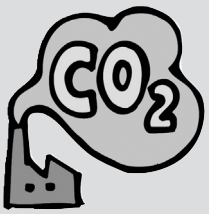
日本は中国の 2.5 倍

１人当たりの CO_2 排出量

現在、地球温暖化の原因である二酸化炭素（CO_2）の最大の排出国は中国です。中国が世界の CO_2 の約 22% を排出し、２番目がアメリカで約 20%、３番目がロシア、４番目がインドで、５番目が日本で世界全体の約 4% です。

しかし、１人当たり排出量でみると私たちは中国の人たちの約 2.5 人分を排出しています。日本の１人当たり排出量は、インドの人たちの約 7.5 人分、後発開発途上国（最貧国）の人たちと比べると約 50 人分もの排出量となります。

中国やインドなどの排出量が増えており、近い将来、途上国の排出量が先進国の排出量を越えると言われています。しかし、１人当たり排出量で見ると、現在、先進国は途上国の約４倍と大きな差があり、この傾向はまだまだ続くと考えられています。



また、CO_2 は大気中に 100 年規模で滞留するので、過去に排出された CO_2 も現在の地球温暖化の原因となっています。過去の排出量を考えれば、地球温暖化問題は明らかに日本などの先進国の起こした環境問題であり、途上国はその被害者であることを忘れてはならないと思います。

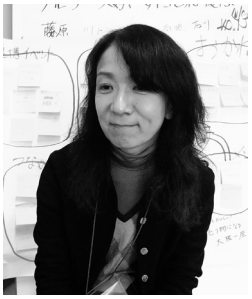
NPO 法人 地球環境と大気汚染を考える全国市民会議
早川光俊（ESD-J 団体正会員）

軽井沢サクラソウ会議 他　今城治子さん

サクラソウをシンボルとして、生物多様性を保全し、次世代に伝えることを目標に活動をしています。そのためには、長い間地域に根付いてきた方々との連帯が欠かせません。私たち自身も地域の農業者とともに農業を実践し、新旧住民や専門家を巻き込んで、自然と共生する農業についての話し合いを開催し始めています。

さまざまな立場・考え方の人の間をつなげるためには、キーパーソンを見極め、その人の理解から広げていくことが重要だと思っています。誰に働きかけるのが最も適切で効果的かを見極めることができれば、その後活動をスムーズに地域へ広げていける可能性が高まりますよね。

田原市社会福祉協議会　菊池邦子さん



私は、地域の福祉ネットワーク活動や、ボランティア団体、子ども会といったさまざまな団体の事務局などで、地域福祉や市民団体活動を支援する活動を行っています。

団体と団体をつなげる仲介役をする際、両者が互いの顔の表情・声の温度が確認できる大きさのテーブルに掛けて話をすることを心がけています。私が活動している田原市はとても古い農村部なのですが、新たに大企業の大きな工場が設けられたため、代々住んでいる旧住民だけでなく、工場の設立とともに移住してきた新住民も多く住んでいます。かつては旧住民の団体と新住民の団体の間で誤解が生まれ、新参者への警戒心や目に見えない縄張り意識等から、感情的な反発が生じ、互いに敬遠しあっていた時期がありました。しかし、両者が互いの顔や声を確認できる話し合いの場を設けることで、両者の歩み寄りを実現することができました。今まで遠くはなれた所から互いの嫌な部分しか見えていなかった人たちも、実際に会うことで相手の人間性を認め合うことがあるものです。

また、両者の関心の矛先を互いの団体に向けるのではなく、地域のニーズ・課題に向けることも大切です。互いに互いのわかり合えない部分に目を向けるのではなく、地域の共通の課題やニーズに目を向けるようにすることで、協同できることがあるのです。両者の立場は違っても、地域を思う気持ちは同じなのです。

また、このような話し合いの場を継続させていくためには、成功体験が重要です。小さな成果でも構いません。その結果、たとえ忙しくても会合に参加することには意味があると感じ、多少の無理をしてでも参加してくださるようになると、とてもうれしく思います。

粋なまちづくり倶楽部 他　八木和美さん

東京の神楽坂で、NPO の一員としてまち歩きガイドなどに携わっています。まち案内では、次回以降に再び訪問される際は「粋な」まち歩きをしていただけるようにするため、まちのことだけではなく、地元の取り組みや思いを伝えることが大切だと思っています。

また、母校の大学の夏期カリキュラムの一環として、学生 20 名ほどと高知県の四万十を訪問し、地域の課題などを学ばせていただいてきました。参加した学生が実際に自分の目で見て、身体で感じたことを自分の日常に持ち帰られるように、地元の人たちとの交流の時間を大切にしてきました。

両方の活動に共通することですが、自然や景観などの地域資源を保全しながら活用するということは、資源の利用量を減らすということだけではなく、地域のコンテキストを関係者が共有することではないかと思います。私自身もさらに理解を深める努力が常に必要ですが、私が関わる人（つなぐ人）に対しても、その思いが伝わるようにと願っています。

（聞き手：ESD-J 佐々木雅一、川口健一）

発見　身近な活動のESDらしさ ＿ 命の循環を体感する地域ぐるみの活動が持続可能な地域社会を育む

生ごみを土に入れて数日たつと微生物が爆発的に増え、ホッカイロみたいに土が熱くなります。土の中に手を入れた人は土が生きていることに感動します。自分たちが土や微生物とつながり支え合っていることを体感し、親しみや感謝の心が自然にわき上がる体験がないと、自然環境の問題はただの知識で終わってしまう恐れもあります。

私たちの活動はコミュニティガーデンを運営しながら、近隣約 200 世帯の生ごみを回収して畑の土と混ぜあわせ、無農薬・無化学肥料で野菜や花を育てています。自治会と協働企画の「ごみゼロ収穫祭」や児童館の幼児親子による芋掘り大会などを通じて、土づくり、農作業、収穫のよろこびをたくさんの親子とともに感じています。また、自立支援の一環として、生ごみの回収作業は知的障がい者とともに行っています。

生ごみの分解過程や農作業の「見える化」は、生ごみ減量、命の学習、食育のみならず、地域の自然環境保全、心身の健康増進や地域コミュニティの再生など、住民にとって居心地のよい持続可能な地域社会づくりにも大いに効果があると思っています。

※「生ごみ先生のおいしい食育」大地といのちの会 吉田俊道著（西日本新聞社出版）より、一部抜粋させていただきました。

まちの生ごみ活かし隊 佐藤美千代（ESD-J 個人会員）

5 ジェンダー平等なESDから、公正で平和な地球社会をつくろう

堺市女性団体協議会委員長　山口典子（ESD-J 団体正会員）

私たちは、ジェンダー平等社会の実現に向け、62 年間活動を続けている堺市では最も歴史ある市民団体です。『自由・平等・平和』を理念に、一人ひとりが大切にされる社会をめざし、女性の人権、教育、環境、高齢者、福祉問題など広範な分野での活動に取り組んできました。

私たちは、1990 年より堺にあるスーパーマーケットの店頭で、消費者に牛乳パックを洗って乾かすことの協力を求め、今日の全国的な牛乳パックやアルミ缶、ペットボトルなどの回収ボックス設置へと繋げてきました。

また、女性の自立と学習の機会を求め、30 年前に女性センター建設を実現しました。以来女性センターで開催する堺女性大学では、年間約 180 回の教養講座が開催され、その中で「環境」や「開発」をテーマとした講座も年間 10 回程度企画し、毎回約 300~400 名の市民が ESD の視点を学んでいます。また、団体内でも幹部研修会などで ESD の取組みを研修し、会員から地域へ ESD を広げています。

今年度は、その女性センターに、国連女性開発基金（UNIFEM）の日本事務所がオープン。国際機関とも協力し、ESD の推進にも取り組んでいきます。

持続不可能な社会の課題は、その原因を掘り下げていくと、ジェンダーに起因します。平和と平等、安心安全な社会の構築に向けた「ジェンダー平等＝ ESD」は、最初から私たちの実践です。

6 街に繰り出しESDを追究する

拓殖大学　石川一喜（個人正会員）

私が持っているゼミのテーマを、今年は “Sustainability（持続可能性）” としました。現代社会が抱える課題を読み解く上で、キーコンセプトであると考えたからです。昨今、メディアを賑わせているニュースはすべてこの “Sustainability” という言葉が少なからずとも関連していると思いませんか。COP15 で協議していることも、日本の年間自殺者数が 3 万人を超えていることも、事業仕分けをする時でさえも、持続可能性を抜きにしては語ることのできない世界になっています。

特にこれから社会に飛び出し、次代を担う学生らには、これら同じ課題に取り組む新しいメンバーとして「よりよく生きる哲学」をそれぞれに持ってもらいたいと感じています。その哲学とは、机上だけでなく自らまちに繰り出して、出会い、感じ取ってくるものです。そのプロセスを通して（私は「歩く学問」と呼んでいますが）、持続可能な開発が何であるのか、彼らなりの軸を定めていってほしいのです。

今年度は手始めに「100 万人のキャンドルナイト」を学部内で企画・実施したり、貧困削減に向けた「スタンドアップキャンペーン」を学園祭で展開したりしました。来年度は、ESD に関連した映像教材の作成と学生が学生自身の意識を変えていけるようなアクションプランをつくれたらと構想をふくらませています。

↑写真は、スタンドアップを行う学生たち（スタンドアップ：ミレニアム開発目標達成に向け、世界中の人々が立ち上がり、行動しようという世界同時アクション）
100 万人のキャンドルナイト http://www.candle-night.org/jp/　　スタンドアップキャンペーン http://www.standup2015.jp/

私たちが ESD-J に入ったわけ

ESDを通して自信と誇りを！

伊豆市立天城中学校（団体準会員 2009 年 9 月入会）

本校は伊豆半島のほぼ中央に位置しています。ESD-J に加わった理由の一つに、生徒の自尊感情が低いという実態があります。持続不可能になりつつある地域が持つ本来のすばらしさに生徒が気づき、自信と誇りを持つようになっていくためには、ESD の視点で物事を見直すことが最適であると考えました。世界に目を向け地球規模の現状・課題を学ぶと同時に、体験を通して地域に目を向け、地域の良さと課題を知り、自分たちに何ができるかを考え行動することを通して、生徒の自信と誇りを取り戻したいと考えています。（大塚明・野木智）

←写真は、紅葉の中、天城山の自然について学ぶ生徒たち

政策提言プロジェクト

つなぐ仕組みをどうつくるのか？

理事を中心に検討を重ねている 2014 年に向けた ESD 推進のための戦略づくり。今後の方向性としては、ESD の質的量的な普及度合いの把握、ESD の見える化の推進、地域の ESD センターやコーディネーターの制度化、政策形成や国際的な情報の受発信を担う全国センターの設置などを、その柱として検討しています。

例えば、コーディネーターの制度化に関しては、学校の指導主事や公民館の社会教育主事、中間支援組織のコーディネーターなど、現職においてその職務の中に ESD の視点を取り入れることが望まれる人たちへの研修の実施、そのネットワーク化と活動の見える化、コーディネーターの設置方法に関する調査・提言活動などを通して、その実現に取り組んでいくことを検討しています。

国内実施計画の中間見直しも始まろうとしています。提言のとりまとめを急ぎ、円卓会議などへしっかり反映させていきます。

（政策提言 PT リーダー / 岡山ユネスコ協会 池田満之）

地域ネットワークプロジェクト

地域再生のための人づくりの指針探る
―ESD×生物多様性 全国フォーラムへの参加を―

ESD ×生物多様性プロジェクトは現在、北海道から沖縄までの 10 事例のヒアリング取りまとめに入っています。2 月 13 日に開催予定のフォーラムの目的は、これらの事例を分析し、①生物多様性を大切にした地域づくりにつながる ESD のあり方を探ること、②そこから 10 月に名古屋で開かれる CBD/COP10 への提言を導き出すことです。

10 件の事例の特徴から、ここでは次のような論点をめぐる議論が予想されます。（1）地域再生のための人づくり、特にコーディネイターの役割、（2）その地域の生物多様性が、地域経済･文化の再生や地域の誇りの回復のベースとなることについて、（3）地域での社会開発における異なる立場の間での対話や合意形成のあり方。

こうした論点を深めることによって、中山間地の限界集落などを含めた日本の地域再生に寄与でき、アジアの農村開発のあり方をも、ともに検討できるようになるでしょう。

「ESD ×生物多様性　全国フォーラム」のお申し込み、詳細は、ESD-J ホームページよりご覧ください。

（地域 PT リーダー / エコ・コミュニケーションセンター 森 良）

ESD-J の活動紹介

研修・普及プロジェクト

沖縄やんばる地域における持続可能な地域づくりを支援する

ESD-J が取り組む研修・普及活動の一つは、全国各地域で行われている持続可能な地域づくりにおける学びを支援することです。例えば、平成 20 年度から現地と協働実施している沖縄やんばる地域（大宜見村・東村・国頭村）での担い手育成事業があります。

全国各地の ESD 実践者を招いて、持続可能なやんばる地域について学び合った昨年度の成果や課題をもとに、21 年度は 3 村関係者自らが村民を対象とした学び合いの場を企画運営することを目標に、企画検討委員会を立ち上げました。ESD-J は、現地開催協力組織であり、ESD-J 団体正会員でもある NPO 法人国頭ツーリズム協会と連携を取りながら、3 回のワークショップを通して、どのような“学び合い”の場を持つことが、やんばるの持続可能な未来につながるかを丁寧に議論し、具体的な講座の企画づくりを支援しました。現在、3 村の担い手たちが創り上げた学びの場が進行中、今後の発展が楽しみです。

（研修普及 PTリーダー / 日本ネイチャーゲーム協会 大島順子）

国際ネットワークプロジェクト

NGO の国際活動推進方策検討

ESD-J は、平成 21 年度環境省請負業務として「NGO 間の連携等に関する推進検討業務」を行います。この業務は、第三次環境基本計画の中長期的な目標である「地球環境の保全と持続可能な開発を考えた環境管理の有効な仕組みを東アジア地域を中心に普及する」ために、「その担い手である多様な主体の意見交換や、連携の機会を拡大すべく、NGO と行政がそれぞれ担うべき役割の整理と行政として NGO をどう支援していくべきか」について検討を行い、また、その検討に基づき、平成 23 年度以降の環境基本計画見直しに向けた提言を取りまとめるとともに、持続可能な開発に向けた NGO 間の連携を促進することを目的としています。

平成 22 年 1 ～ 3 月にかけて 3 回の検討会を開き、環境を含む多様な分野の国際協力 NGO と一緒に具体的な事例に即した検討を行うとともに、日本の NGO が行える貢献について、第三次環境基本計画見直しに向けた基礎資料と提言案をとりまとめます。

（国際ネットワーク PT リーダー / 金沢大学 鈴木克則）

★ ESD-J の実施事業に関しては、ESD-J のウェブサイト「ESD-J の活動」のコーナーで詳しく紹介しています。

トピックス「持続可能な地域づくり/ESD実践者のためのコーディネート実践トレーニング」開催

地域社会を持続可能にしていくためには、ESD の視点を持ったコーディネーターの存在がとても重要です。ESD-J は地球環境基金の戦略講座の一環として、2009 年 12 月 12 ～ 13 日の 2 日間、「持続可能な地域づくり /ESD 実践者のためのコーディネート実践トレーニング」を開催しました。研修には関東・中部・近畿から、地域や学校における ESD の実践者や、社会福祉協議会、市民活動支援センターなどのスタッフ 30 名が参加、初挑戦のコーディネーター研修事業は、参加者にも恵まれ、実りの多い学び合いの場となりました。

この研修の特徴は、対象者をコーディネートの現場を持つ人とし、参加者が現場で抱えている課題を実習の題材としたことです。一日目は地域課題を引き出す傾聴トレーニングを実施。このトレーニングは、相談者の背景にある真の課題を引き出すという能力のトレーニングをしながら、自分が相談した課題へ具体的なアドバイスが得られるというしくみです。二日目は参加者の課題を題材に、ESD の視点を活かした課題解決プロジェクトの企画づくりを実践。都市農村交流や商店街の活性化、障害者による劇団を核としたプロジェクトなど多様なテーマに取り組みました。

研修終了後は、参加者の発意でメーリングリストもスタート。ESD を意識するコーディネーターのつながりを、今後、どんどん広げていきたいと考えています。

お役立ち情報BOX　ESD の実践に役立つ情報 あれこれ

映画「ダーウィンの悪夢」

監督：フーベルト・ザウパー
時間：112 分　　DVD 税込価格：3,990 円
発売元：ジェネオン・ユニバーサル・エンタテインメント

「ダーウィンの箱庭」と言われるほど多様な生物が生存していたタンザニアのビクトリア湖。そこに誰かが 50 年前、肉食の外来種、ナイルパーチを放流した。人の背丈ほどもある巨大なナイルパーチの切り身は、湖畔の村の一大輸出産業になり、EU や日本に輸出され、富をもたらした。それに伴って多くの貧しい人びとが内陸部から湖岸に来たが、彼らは、頭やアラなど、切り身を取り除いた魚の残骸、それも腐りかけたようなものしか食べられない。

生態系は破壊され、魚を空輸する旧ソ連のパイロットや漁師相手の売春婦が集まり、エイズが蔓延し、ストリートチルドレンが町にあふれる。そこにはナイルパーチと在来種の魚との関係に象徴されるように、一部の強者と多数の弱者が存在する。

貧困や治安の悪化にはさまざまな原因があり、ナイルパーチによるものだけでないという批判もある。しかしグローバル化のもと、遠くからやってくる商品の向こう側で何がおきているかを考えるのには、最適の教材である。「地産地消」できることが、いかにぜいたくなことかと、改めて思った。

（フェアトレード・サマサマ事務局長　小吹岳志）

社会を考えるときに見たい映画

新メンバー紹介 10~12月

1 団体・14 名の方が会員としてご入会、1 団体が連携交流団体として登録されました。

団体準会員　NPO 法人里山倶楽部　　個人会員　関東 8 名、中部 2 名、北陸 2 名、近畿 2 名　　連携交流団体　国連人口基金（UNFPA）東京事務所

編集後記

人間と生物が共存できる社会の形成を通して環境問題改善に貢献したいと思い、生物と社会の接点に関して勉強しています。学部時代の教育実習では、教師の努力次第で子どもはどのような方向にも変わりうることを実感し、教職の責任の重さとやりがいの大きさを感じました。教育と環境、双方向への貢献を夢に生物の教師を目指しています。「つなぐ人の視線」の取材では、実践者の方々の豊富な経験に基づく考え方や技術、具体的行動に繋げる力に感服でした。
（ESD-J インターン 京都大 / 地球環境学舎 川口健一）

ESD-J だより

2009 年 10 月～ 12 月の活動報告

10 月 1-2 日	地球市民会議 2009　共催
10 月 17 日	ESD カフェ緊急企画! ビニヤ・アリヤラトネさんを囲む会　開催
10 月 23 日	日中韓環境ジャーナリスト NGO 交流セミナー　参加
11 月 1 日	ESD レポート 20 号　発行
11 月 6-7 日	［ESD ×生物多様性］事業 四国事例ヒアリング
11 月 10 日	JANIC セミナー「生物多様性 COP10 に向けて 一国際協力 NGO の役割一」　参加
11 月 10 日	第 8 回 ESD カフェ 寺子屋運動に学ぶ 持続可能なコミュニティを育む学びのヒント　開催
11 月 12 日	文科省 ユネスコプロジェクト 第 1 回 多摩市 ESD 教員研修　開催
11 月 17 日	NPO 法人 HANDS ブラジルプロジェクト ヒアリング
11 月 24-25 日	環境首都を目指す自治体フォーラム　出席
11月29日	文科省ユネスコプロジェクト 多摩食育イベント　出席
11 月 30 日	文科省ユネスコプロジェクト 第 2 回 多摩市 ESD 教員研修　開催
12 月 2 日	環境省 第 3 回「地域の ESD 取組強化のための制度設計」検討会　開催
12 月 8 日	第 9 回 ESD カフェ「持続可能な社会に向けた人づくり 企業の役割 &NGO の役割」　開催
12 月 9 日	環境省「ESD コーディネーター育成」検討会
12 月 9 日	ESD レポート第 21 号編集会議
12 月 11 日	エコプロダクツ展セミナー「企業がすすめる ESD 視点の環境教育の動向」パネリスト
12 月 11 日	文科省ユネスコプロジェクト 第 3 回 多摩市 ESD 教員研修　開催
12 月 12-13 日	コーディネート実践トレーニング 開催
12 月 17 日	外務省 NGO 研究会「コミュニティ開発支援無償」　参加
12 月 18 日	［ESD ×生物多様性］事業 関東事例ヒアリング
12 月 19 日	理事懇談会　開催
12 月 23 日	第 2 回理事会　開催

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）
http : //www.esd-j.org/　　e-mail : admin@esd-j.org
〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-67　コスモス青山B2F
TEL : 03-3797-7227　FAX : 03-6277-7554
● 会員募集中：正会員（10,000 円）、準会員（3,000 円）詳しくは HP をご覧ください ●

発行 : NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議　編集 : ESD-J 情報共有プロジェクトチーム　レイアウト : 河村 久美

ミックス品 FSC認証林及び管理された森林からの製品グループです www.fsc.org Cert no. SGS-COC-2693 © 1996 Forest Stewardship Council
この印刷物は、適切に管理された森林の認証木材から作られた紙と、フードマイレージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。